

Title	現代日本語における動詞・条件形の派生用法に関する記述的研究：「みる」「いう」「おもう」を中心に
Author(s)	河, 在必
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59395
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【32】

氏 名	河 在 必
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 5 3 4 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	現代日本語における動詞・条件形の派生用法に関する記述的研究 — 「みる」「いう」「おもう」を中心に —
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 工藤真由美 (副査) 教 授 渋谷 勝己 教 授 田野村忠温

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語の視覚活動、言語活動、思考活動を表す動詞である「見る」「言う」「思う」を対象にして、文構造の変容と関連しつつ、条件関係を表す本来的な動詞としての用法から脱動詞化が進んでいく過程について分析したものである。本文 148 頁、400 字詰め原稿用紙換算 500 枚よりなる。

第 1 部「序論」は、第 1 章「研究の目的」、第 2 章「先行研究」、第 3 章「研究資料及び方法」よりなり、語彙論的、形態論的、構文論的観点から行われてきた動詞及びその条件

形に関わる多くの先行研究を精査した上で、3つの動詞を対象にして、脱動詞化の方向性にはどのようなものがあるか、脱動詞化した場合に、文構造と語形のあり方にどのような変容が起こるのかについて、網羅的な分析・記述を行うと述べる。

第2部「本論」は、第4章～第7章よりなる。まず第4章で、動詞の条件形としての用法について、基本的な用法と非基本的な用法に分けた上で、先行研究の成果を確認する。その上で、第5章では、「見る」における脱動詞化した派生的な用法である後置詞化と副詞化について、第6章では、「言う」における派生的な用法である後置詞化、副詞化、接続助詞化、接続詞化について、第6章では、「思う」における派生的な用法である接続助詞化、接続詞化、副詞化、後置詞化について、量的分布や前節要素にも注目しつつ分析している。

第3部「結論」では、第2部における個別的な記述の総合化を行う。第一は、3つの動詞に共通して、本来の動詞・条件形としての用法と派生的な用法とでは、文構造及び語形における語彙的側面、形態論的側面、使用のあり方の側面においてまったく異なる様相を示すことであり、具体的には、文構造が、2つの事象間の因果関係を表す複文から単文へと変化するとともに、中心的な述語のタイプが、具体的な現象を表す動詞述語から発話者の評価・判断を示す形容詞・名詞述語へと変容し、あわせて、語形「すると」「すれば」を中心に、動詞らしさが失われて文法的機能が前面化しつつ、語形の固定化が進み、使用形式の限定化が起こることを指摘している。第二は、脱動詞化の方向性には、後置詞化、副詞化、接続助詞化、接続詞化の4つの方向性が見られるが、その結果として動詞の語彙的意味の漂白化が進む結果、「教師の立場からいえば／いうと／みれば／みると」のように、4つの形式間の文法的な違いが無くなっていくという現象が起こることを指摘し、このような後置詞化及び副詞化が3つの動詞に共通する脱動詞化の方向であると分析している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、限られた動詞の分析に留まっただけではあるが、事例を丹念に収集した上で、2つの事象間の因果関係を表すという典型的複文から、発話者の評価・判断を示す単文へと変容していくプロセスに注目して分析した労作である。アスペクトやみとめ方といった形態論的カテゴリーの有無に関わる語形のあり方と、動詞述語か形容詞・名詞述語かという述語のタイプ及び複文か単文かという文構造の変容とを相関的に捉えて分析したことは評価すべき点である。現代日本語における動詞・条件形のうち、モダリティーの観点から見て、発話者の論理が前面化している条件形「する（した）なら」「したら」には脱動詞化が起こらず（起こりにくく）、「すれば」「すると」のような客体の論理の方が前面化している条件形において後置詞化、副詞化、接続助詞化、接続詞化が起こりやすいという興味深い事実の指摘も行っている。

ただし、今後の課題にも述べているように、個別的事実の指摘に留まり、なぜそうなるのかの説明が不足していると思われる。この原因は、3つの限られた動詞に限定してしまったこと及びその選択の根拠が必ずしも十分ではないこと、基本用法、非基本用法、派生的用法に分ける根拠が十分に明示できていないこと、さらには、後置詞等に関する厳密な

規定が十分ではないことにあり、このような理論的な視点の欠如が論文構成上の不整合性も招いている。事例に基づく個別的な興味深い事実の指摘は多々見られるが、総合的な観点からのモデル化には成功しているとは言い難い。日本語コーパスが十分に整備されてきていることから、今後、記述対象の拡大化を行うとともに、移行過程の中間段階の精密な分析を進めることにより、単なる事実の指摘から、文体差も含めて、多様な意味・機能を発達させていく動詞・条件形の有り様をダイナミックに理論的に捉えていくことが可能になると判断される。歴史的観点からの考察も不可欠である。

本論文は、このような未完成な部分を多く残してはいるが、部分的な用例に基づく安易な解釈に甘んじることなく、綿密な考察によって興味深い事実を発掘・分析し、今後開拓していくべき方向性を提起した点で積極的評価が与えられるものとなっている。本論文では実施できていないが、著者の母語である韓国語との比較対照が行えるようになる可能性を有した論文となっていることから、共時的ならびに通時的観点からの韓国語との対照言語学的研究にも期待したい。

よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると認定する。